

## 2006年台湾実態調査報告

池 本 正 純

このたび経営研究所のお世話で台湾の調査旅行に同行させていただいた。私自身台湾を訪ねるのは、昭和50(1975)年以来ほぼ30年ぶり2度目となる。当たり前のことであるが、町並みはまったく変わっていた。近代的な高層ビルが増えたというにとどまらない。すべてがきれいになっていた。

対照的な記憶はタクシーである。当時のタクシーはお世辞にも立派とはいいがたく、走っている最中にドアが開きかけて驚いた。運転手あわてる風でもなく、「開かないようにドアを持っていてください」と言っただけなのにさらにはびっくりしたものだ。座席も汚く、降りるとき服が汚れていないか確かめたりもした。いまは走る車という車がすべてきれいになっていた。

それともう一つの大きな変化は、かつては大通りのそこかしこに、銃を持った兵士が険しい顔で見張っていたものだが、いまはまったくそのような気配がない。平和が定着したが故の経済発展だったのだと納得した。

はじめに訪問したNICE GROUP(耐斯企業集団)で印象に残っているのは、洗剤やシャンプーで結構がんばってシェアを維持しており、精力的に多角化の展開をしている会社なので、当たり前のごとく「化粧品への進出は考えていないのか」と聞いたところ、「それはまったく考えていない」という返事であったことである。日本の花王の類推で物を考えてはいけないということか。化粧品の分野は「すでに成熟している」という。入り込む余地はないという判断なのだろう。

台北市政府の建設局幹部の方にサイエンスパークの話をお聞きしたのも興味深い内容であった。内湖科技園区には環境問題も絡むので、本社機能や研究開

発部門に特化したベンチャー企業の誘致を行い、製造基地は別のところに工業区として開発し、農地から商工業用土地への転用を図ろうとしているという話であった。実際に、開発された地にも案内されたが、いま東京の台場・有明地区として発展を遂げている東京湾埋め立て地区に、かつて30年近く前に東京都の幹部の方々に案内されたときの記憶がよみがえったものだ。帰りがけに、花卉のマーケットを見学したが、市場のつくりや仕組みが日本と共通しているのは面白かった。とくに、胡蝶蘭をはじめとしたさまざまな種類の蘭のマーケットとして台湾が大きなシェアを占めているということを今回はじめて知った。当然のことながら、これは蘭の開発に対してたゆまざる努力が傾注されていればこそその成果である。

今回の旅の中で、専修大学の卒業生で儀我先生の教え子でもいらっしゃる卓恵眞女史が同行してくださったのはわれわれにとっても幸いであった。卓さん自身は、久しぶりにお会いになったご高齢の(?) 儀我先生に少しでも付き添ってあげたいというお気持ちで一杯であったのだと推測するが、バスでの移動の最中、彼女から貴重な話を聞かせてもらうことができた。とくに最近の台湾金融業界の再編成の動きについて、幸いにも日本語で解説をしてもらった。台湾も、日本と同じく、銀行業界が大規模化に向かってダイナミックに再編成されつつあり、また金融システムが証券化の方向へと大きく舵を切っているということであった。このあたりの話を中華経済研究院の中核的研究員から直接聞けることになるとは、今回の旅の予想もしない収穫であった。